

第3章 19世紀櫻井家たたら山内の人口動態

相良英輔

たたら製鉄に従事する労働者の居住地である山内がいつ成立したか明らかではないが、櫻井家の現存する南土蔵が建てられたのは享保20(1735)年であり、母屋は元文3(1738)年に建築され、今日まで居住されている。櫻井家の鑪場で、創業時期、場所のはっきりしている最も古いものは、上阿井の伊弉冊鑪^{いざなみたたら}であり、享保6(1721)年から同13(1728)年まで操業している(「旧記」)。これらのことから、享保年間に上阿井の内谷で大規模なたたら経営がおこなわれるようになり、山内もこの時期に成立したと推定される。櫻井家には寛保2(1742)年の「仁多郡上阿井村鉄方鍛冶屋者亥宗門御改目録」が残されている。宗旨人別帳は鑪鍛冶屋主によって作成された。櫻井家は、享保11(1726)年の「鉄方方式」によって鑪一ヶ所、鍛冶屋一軒を許可されたが、鑪場は、この時以来、伊弉冊鑪^{いのこほら}、猪子原鑪、奥湯谷鑪と数年ごとに替えられているが、鍛冶場は初期においてその位置がはっきりしない。安永3(1774)年にははじめて上阿井村内谷鍛冶屋一軒を許されたことがわかる(万延元(1860)年「系図并代代御称美寸志上納勞錢鑪鍛冶屋御免場所替書出」)。内谷鍛冶場は天明3(1783)年まで10年操業して中断し、寛政2(1790)年再び許されて、文化8(1811)年まで22年操業し再び中断している。しかし一方で、安永9(1780)年に同じ上阿井村内谷で新鍛冶屋一軒を許され、これは幕末、近代以降まで操業している。つまり櫻井家は享保20(1735)年南土蔵を建てたころには上阿井村内谷を住居だけではなく、たたら製鉄業の核にしていたと思われる。従って鍛冶場は母屋と共にあって場所を替えず、鑪場は周辺の木を伐りつくすと共に替えていったのである。横田の絲原家はこれと異なり、天明8(1788)年以降、雨川村雨川鑪は母屋と共にその場所を移ることなく、鍛冶場を転々と替えている。

ところで、櫻井家のたたら製鉄の拠点が上阿井村内谷に固定すると、当然山内もその近辺に成立する。櫻井家に所蔵されている山内の宗旨人別帳で最も古く完全なものは寛政6(1794)年の「従寺方宗旨證拠帳」三冊である。これは「仁多郡上阿井村鍛冶屋主源兵衛」と組頭祐左衛門、下郡四郎左衛門が連署して藩に提出している。それを集計したものが第1表である。この時点における山内の規模、家族構成、宗旨がわかり興味深い。55家族、187人が上阿井村山内の居住者である。一人者は11人であるから、44人が女房、子供や親、兄弟などの家族と生活している。なぜか女房がおらず、子供や親、兄弟と一家をなしている者が32人もいる。女房と離縁したか先立たれた者であるが、やや多すぎる。しかしながら山内の鑪者、鍛冶屋者といわれた労働者は多く家族持ちであったことがわかる。

第1表 寛政6年 櫻井家鉄方鍛冶屋者宗旨別家族・人口

宗旨	家族数	男	女	計
禪宗	6	13	5	18
法華宗	2	3	1	4
真宗	47	106	59	165
計	55	122	65	187
内女房持				12
一人者				11

寛政6(1794)年「従寺方宗旨證拠帳」三冊による。

その後、櫻井家の上阿井村山内の人口は徐々に増大し、天保 2（1831）年 317 人、同 3（1832）年 336 人、文久 3（1863）年には 401 人と拡大している。寛政 6（1794）年から文久 3（1863）年まで 69 年間で山内人口は 2 倍以上になっているのである。たたら製鉄は幕末にはかなり需要を増大させていった。櫻井家の鉄は、近世中期にはその多くを大坂へ出荷していたが、幕末には北前船によって北陸、東北方面へも出荷するようになった。年次が明確でないが、幕末、櫻井源兵衛直昇、同録三郎の時代（のちに三郎左衛門、さらに三郎右衛門と改称）、櫻井家は福井の九頭竜川河口右岸の三国湊に店を構えていた宮腰屋に鉄を販売しており、その仕切状が 200 通以上櫻井家に残されている。なかには一回の取引が千両、二千両のものもあり、櫻井家の鉄が盛んに北前船により運ばれていったことを示している。その交易を支えたのが、山内労働者であったのである。

ところで、櫻井家には山内住人の「宗門放證文」と「宗門受取證文」が合計 174 通残っており、これが 1 冊に綴じられている。これによって文化 2（1805）年から嘉永 2（1849）年までの 44 年間の山内人口流動性を知ることができる。「宗門放證文」は、山内から出ていった者を宗旨人別帳から除くことを庄屋に届け出たものである。「宗門受取證文」は山内に新たに入ってきた者を宗旨人別帳に加える旨庄屋に報告したものである。174 人のうち、110 人が山内から出ている。山内を出た理由をみると、結婚（女性）58 人、養子 10 人、離縁 5 人、家族共引越 14 人、一人引越 7 人、「勝手ニ付引越」3 人、「行方不知」13 人である。結婚のため山内を出ていった女性の多くは、近隣の村へ嫁に行っている。しかしなかには備後国恵蘇郡森脇村や和南原村へ、さらに能義郡の広瀬藩上山佐村、鳥取の日野郡萩原村へ嫁に行っている者もある。備後国恵蘇郡は櫻井家が出雲国へ入国以前に居住していたところであり、広瀬藩は松江藩の分家が藩主であり、比較的抵抗が少なかったであろう。日野郡はたたら製鉄の盛んな所であり、なんらかの縁があったのであろう。

山内に入ってきた者 64 人の内訳をみると、鉄方鍛冶屋者との結婚（女性）37 人、養子 11 人、離縁して帰った者 7 人、鍛冶屋者として山内に入った者 3 人、その他 6 人である。

山内を出た者 110 人のうち 76 人が女性であり、うち 58 人は結婚のためである。また山内に入ってきた者 64 人のうち女性は 48 人で、うち 37 人は結婚のためである。

ところで、文化 2（1805）年から嘉永 2（1849）年までの 44 年間で、山内から出ていった者が入ってきた者よりはるかに多いのはなぜだろうか。寛政 6（1794）年から天保 2（1831）年までの山内人口は 130 人もふえ、その後もふえ続けているのである。生産の拡大によって二、三男を新たに山内鍛冶屋者に抱えこむことができたと考えられる。

ともあれ、鉄方鍛冶屋者の所へ近隣の上阿井村、下阿井村、さらには三沢町、また備後国恵蘇郡の和南原村や大内村からも嫁に来ている。山内と村との交流はごく自然におこなわれるようになっていたことを示している。